

山崎耕一・松浦義弘編

## 『フランス革命史の現在』

山川出版社 二〇一三・一一刊  
四六 二八八頁 三〇〇〇円

本書は、二〇一二年四月に日仏会館において開催されたシンポジウム「フランス革命史の現在」を基本として編まれたものである。

まず、序章「フランス革命史研究の現状」（松浦義弘）では、フランス革命研究において長らく支配的であった「ブルジョワ革命論」とその否定論が概観され、次に一九八〇年代後半から本格化する「政治文化」論と、これに大きな影響を受けながらも多様なテーマで展開している近年の研究動向が整理されている。その具像は、以下の各章が示している。

第一章「世論が導くフランス革命」（平正人）は、新聞やパンフレットといった出版メディアが、どのように世論を醸成し、革命の方向性を作り上げていったのかという点を分析したものである。第二章「パリの民衆運動と暴力」（早川理穂）は、民衆運動における暴力の様相とそれに付与された意味に着目し、革命前と革命期の「暴動」の違いを指摘する。

第三章「共和国フランスは神を求め」（山中聡）は、諸宗教の「礼拝の自由」が保障された革命後期における、国家宗教再興の試みを明らかにしたものである。

第四章「礼拝を護るのは誰か」（松嶋明男）では、ナポレオン期に公認宗教体制が打ち出されるまでの、宗教の自由をめぐる政治過程とその後の展開が整理されている。

第五章「理想の公教育への挑戦」（竹中幸史）は、教育の無償と義務をうたい市民教育も重視したブキエ法が、地方都市ルーアンでどのように施行されたのかを明らかにした。

第六章「明治期日本におけるフランス革命観」（高橋暁生）は、明治期の日本の知識人がどのようにフランス革命を叙述したのかという点を、その背景とともに論述したものである。

第七章「日本史からみたフランス革命」（三谷博）は、日本史の専門家である著者が、明治維新とフランス革命を、革命の期間と経緯、民衆騒擾と政治運動の関係、ナショナリズム、革命と知的空間の観点から、比較したものである。

終章「フランス革命史研究の未来」（山崎耕一）では、ブルジョワ革命としてのフランス革命という大きな物語が説得力を失った現在において、社会の状況と連動しながら展開しているフランス革命研究の今後の課題として、情報の問題、宗教と暴力からの近代の再考、グローバリゼーションの視点が打ち出されている。

以上のように、本書は、フランス革命をめぐる研究史を丹念に整理し、近年の研究成果を盛り込んだ、意欲的で画期的な内容となっている。だが、疑問点も残った。まず、ブルジョワ革命論およびその否定論と、近年の政治文化史の接続の問題である。序章でも指摘されているように、政治文化史を牽引してきたリン・ハントは政治文化を担った政治階級も分析したが、政治文化論の影

響を強く受けている現在の研究において、社会経済的なアプローチはどのように具体化されているのか。また、ハントがジェンダーの視点を重視していることをかんがみるとき、ジェンダーの問題はどのように取り組むべきか。

しかしながら、本書は、現在の研究状況を的確に見取り図として提供しており、初学者をはじめフランス革命に関心のある研究者にとって必読の書であることは間違いない。

(仲松優子)